5章　近代武道の形成

明治維新になると、政府は明治 4（1871）年に廃藩置県を行い、同 9（1876）年には廃刀令を出すなど、相次いで封建諸制度を排して新しい欧米の文明を導入したため、武士の特権は失われ、武芸は旧時代の遺物とみなされ急激に衰退していく。そうした中、剣術を復興させようと直心影流の達人・榊原鍵吉（さかきばらけんきち）は明治 6（1873）年から撃剣興行（げきけんこうぎょう）を行う（資料 20）。この興行は剣客を大相撲のように東西に分けて行い、見分役（＝行司）が扇を挙げて立合い三本勝負を行い、観客からお金を取るというもので一時的なブームで終わったが、その後の剣道への橋渡し的役割を果たした。



資料 20）撃剣興行（渡辺一郎『史料明治武道史』新人物往来社）

●武術家に光明を与えた山岡鉄舟と嘉納治五郎

新しい時代をどのように生きていくかを迫られた武術家に光明を与えたのが、明治 15（1882）年に、「春風館」道場を設立した剣術の山岡鉄舟（やまおかてっしゅう）（資料 21, 1836 ～ 1888）と講道館柔道を創始した嘉納治五郎（かのうじごろう）（資料 22, 1860 ～ 1938）である。山岡は、剣と禅の修行を通じ剣術は勝負を争うのではなく、事（わざ）と理（理合）との一致を目指す過程で心を磨き、「敵と相対する時、刀に依らずして心を以て心を打つ、是を無刀という」と唱え、明治 13（1880）年に無刀流を開く。その後、春風館という道場を立てて門弟の指導に努めていく。



資料 21）山岡鉄舟（勝部真長『武士道―文武両道の思想―』角川書店）

ここでの稽古は、一人で次々と掛かってくる者を相手にする立ち切り試合を 1 日に 200 試合も行うというもので、自らを極限にまで追い込み、心を鍛えることを目的とした荒稽古であった。山岡による“剣術は修養である”という考え方は、その後に教育論として活かされていくことになる。



資料 22）嘉納治五郎（講道館蔵）

一方、嘉納治五郎（資料 22）も身体虚弱を克服するために柔術に取り組み、柔術を集大成して明治 15（1882）年に講道館柔道（こうどうかんじゅうどう）を創始する。嘉納は、明治 10 年に東京大学に入学すると天神真楊流と起倒流柔術などを学び、やがて急所を突く当身技や関節を折るなどの危険な技を省き、また稽古衣の袖と下穿（したばき）を長くして、誰もが安全に行えるように柔術の「残り合い」を改良して乱取（らんどり）を創作する（資料 23、24）。

また、東京大学においては東洋の儒教と西欧の功利主義思想を学び、明治 22（1889）年に柔道の目的として「体育・勝負・修心」の三つを掲げる。「体育」とは柔道により身体を強く健康に敏捷性を増すようにと説き、「勝負」では相手の姿勢を前後左右に崩して合理的に投げることを強調した。「修心」とは、古来、武士が武術によって心胆を練ってきた事実を踏まえ、道場というさまざまな人が稽古を行う中で、克己や礼節などの社会性を身に付け、併せて、言語や想像などの智力も養うことができるとした。

こうして智・徳・体を備えた人間教育を目指したのである。さらに、奨励のため段位制度を設け、試合における二本勝負の採用、寒稽古の復活など在来の武術を近代教育に見合うように合理的な方法を確立したのである。

大正時代に入ると、嘉納は柔道によって「己の完成」を目指し「世を補益する」という柔道の目標を掲げる。「己の完成」とは自分の技がどこまで成長したかを自ら見極めることであり、「世を補益する」とは自分で考え行動できる力を養った上で世の為に尽くすという意味であった。そのための指導法として、“ 乱取、形、講義、問答 ” を設け「人間教育の道」として学校教育の場に活かしたのである。

柔道と剣道、その特性からくる違いはあったが、嘉納も山岡も術を通して道に至る心身の鍛錬が人生の基礎をなす、という考え方は共通しており、この精神は武道の普遍的価値として生き続けていくのである。



資料 23）柔術の短袖短袴での背逐投
（吉田千春 , 五世磯又右衛『柔術極意教習図解』青木嵩山堂）



資料 24）柔道の背負投
（向井幹博『役に立つ少年柔道指導法』日本武道館）

●総合名称としての「武道」の定着

明治 20 年代には、明治 22（1889）年の帝国憲法発布や明治 27 ～ 28（1894 ～ 1895）年の日清戦争などによる国民のナショナリズムの高揚と富国強兵策をもとに、武術への関心が高まる。こうした情勢下で、かつて桓武天皇が武徳により世を治めたことに倣い、維新以来衰退した武道を復興し国民の士気を養おうと、明治 28（1895）年、京都に大日本武徳会が創設される（資料 25）。大日本武徳会は、武術の奨励や指導、大会の開催などの事業を行い、やがて武術専門学校を設けて中等学校の武道教員を養成していく。

北海道長官や警視総監を経て大日本武徳会副会長・武術専門学校校長となった無刀流剣術を学んだ西久保弘道（1863 ～ 1930）は、武道の目的を「酷暑厳寒に耐える身体と、如何なる場合にも動ぜず泰然自若たる度胸を養成すること」と述べ、心身の鍛錬にあると強調した。そして、嘉納が柔術の名称を柔道としたように剣術は剣道に、武術は武道にすべきであるとして、大正８（1919）年に武術専門学校を武道専門学校としたのである。こうして、柔道や剣道、弓道の総合名称としての「武道」が定着したのである。

●学校体育と武道

学校体育における武道の採用についてみていこう。明治の初め頃は、文部省は医学的見地から外来の体操を生徒の調和的発達を図るものとして学校体育に採用した。一方、日本伝来の武術は子供にとって多少危険であり、一斉指導には不向きであるとして採用に否定的であった。やがて、政治家・星野仙蔵らから武術を学校体育に採用してほしいといった国会への請願が行われ、また中等学校で柔道や剣術が行われる所が増加したので、文部省はついに明治 44（1911）年に、「撃剣柔術」が生徒の心身鍛錬に効果があるとして「正課」に加えたのである（ただし選択であった）。

大正２（1913）年には、学校体育の統一的な指導方針である「学校体操教授要目」が制定され、中学校男子に撃剣及柔術が選択として採用され、同 15 年の「改正学校教授要目」で撃剣が「剣道」に柔術が「柔道」に変わる。昭和６（1931）年には満州事変が勃発し、戦時色が濃くなって体育が国民思想の善導と関わってくる。



資料 25）大日本武徳会武徳殿（渡辺一郎『史料明治武道史』新人物往来社）

武道が正課必修となるのは同年の「中学校令施行規則」改正からであり、その理由は「剣道及柔道が我が国固有の武道にして、質実剛健なる国民精神を涵養し、心身を鍛錬するに適切である」とされ、武道による心身鍛錬と質実剛健な国民育成が謳われたのである。ここに至り、近世において区別して使用されていた「武芸（術）と武士道」の概念を包括した意味合いで「武道」という用語が定着したのである。同 11（1936）年には「第二次改正教授要目」が公布され、柔・剣道の授業は「基本動作・応用動作・形・講話」からなり、「講話」の中で武道や修行の目的が話されるようになったことは他の体育教材に無い武道独自のものであったのである。

社会体育の方面では、日本は大正元（1912）年の第 5 回ストックホルムオリンピック競技大会に初参加（資料 26）して以降、各種スポーツ団体の組織化とともに全国的な競技会が開催されるようになる。現在の夏の甲子園大会の前身である全国中等学校野球大会は大正 4（1915）年に始まる。

こうしたスポーツ界の動きに呼応し、柔道は大正 3（1914）年に第 1 回全国高等学校専門学校柔道大会が開催され、翌 4（1915）年から中等学校柔道大会が開催される。剣道は、昭和 3（1928）年に全日本学生剣道連盟が結成されると第 1 回全日本大学高専剣道大会を開始し、同 5（1930）年からは中等学校剣道大会も開催され、審判規定も外来スポーツと比較されることになり競技化への弾みがついていくのであった。



資料 26）日本のオリンピック初参加（左端コート姿の男性が嘉納治五郎 IOC 委員）
（『写真図説柔道百年の歴史』講談社）